

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第454号 2020年1月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

体験は言葉を通して はじめて経験となる

佐々木 晃

「スペシャルジュースをどうぞ。」
 「ありがとうございます。いただきます。」私
 が容器に口をつけて飲みかけると、
 「だめだよ。園長先生。本当に飲
 んじゃ」と幼児にあきれられた。
 すっかり興奮してしまつた様子で
 ある。幼児たちのごっこ会話に
 ジョークを挟めば、「園長先生、ふ
 ざけないで。これは遊びじゃない
 のよ」と、注意される。幼児の遊
 びは不思議で奥深い。

「ドングリの事例」。登園すると、
 3歳児のカナコはすぐ築山に駆け
 上がっていく。この日も小柄なカ
 ナコはクヌギの根本にあるサツキ
 の植え込みに埋まるように膝を抱
 えて、いつもの定位置で物思いに
 ふけるような表情でいた。私も彼
 女の隣に座して同じように膝を抱
 えた。私は、当時、カナコのこと
 が気がかりであった。鬼ごっこに
 誘っても「いや」と首を振った。
 おやつすら食べない日もあった。
 私は友達関係が原因かと心配した
 こともあった。家庭での様子を母
 親に尋ねもした。
 「明かされた真実」。研究紀要作
 成のため大学3年生のカナコにイ

ンタビューした。
 「15年ぶりに幼稚園に行つてみ
 て、あの頃のまま、クヌギの木
 があつたのに驚きました。私は、
 あの築山でびかびかのドングリ
 が落ちてくるのをずっと待って
 いたんですよ。あのクヌギの
 木から落ちるドングリは、特別
 なドングリに思えたんです。
 ・中略・皆でつくる基地
 は遊戯室の積み木、一人の基地
 は剪定したカイヅカイブキの中
 だったのですが、その中央に座
 ると空がぼっかり見えました。
 木と空との境界線がくつきりし
 ていて、その境界線の先から絵
 本の世界に入っているように
 感じていました。サルビアの花
 の蜜は甘かったし、真っ赤なイ
 チゴは長くて細い茎の先にコロ
 ンとしていました。折り紙の貝
 がらつなぎにはまり、切り目を
 入れて対角線でつなぐとふっく
 ら丸まったのを覚えています。
 言い出したらきりがありません。
 不思議に思うことがいっぱい
 でした。」
 今は大学生になったカナコの話
 を聞き、幼児期の遊びが人の学
 びや成長に深くかかわっていること
 をうれしく思った。その一方で、
 行動観察では捉えることのできな
 かった私の未熟さを痛感した。
 好光先生の「体験は言葉を通し
 てはじめて経験となる」(花明り
 六七号)の通り、保育者もまた、
 幼児との対話の中で、体験の意
 味を紡いでいかないと経験という質
 には到達できない。保育の質は対
 話の質でもあると思つている。
 (鳴門教育大学附属幼稚園園長)



▼「言葉による見方
 ・考え方」「主体的
 ・対話的で深い学
 び」の研究や実践の
 成果が紹介され、求
 めているものや方向
 が明らかになってき
 た。昨年夏の日本国
 語教育学会で田近
 洵一先生は、芭蕉の「古池や蛙飛
 込む水の音」の表現過程を、「岩
 鼻やこゝにもひとり月の客」では
 去来と芭蕉の作品に対する捉え方
 を例に言葉による見方、考え方に
 ついてお話をされた▼全国大学
 語教育学会では、「文学教育にお
 ける『深い学び』」のシンポジウ
 ムで、鶴田清司先生は、「ごんき
 つね」の子ども感想を引用し「深
 い学び」に言及された(学会誌8
 6集)その作文は「友達の教科書
 を借りて絵をかいてしまった。ゴ
 メンねと謝ったときは許してもら
 えたが昼休みには許してもらえな
 い。手紙で書いても許してもらえ
 ない」というもの。感想には、「わ
 たしはごんであり兵十でもある」
 と述べた部分を取り上げておられ
 た▼あらためて、「国語の授業で
 言葉や学ぶ」ということは、言葉
 に新しい意味を見つけることにあ
 るのだからと考えた。教材を読む
 とき、おやっと思つて立ち止ま
 った言葉を「こういう意味」と置き
 換えるのは簡単。置き換えること
 を含め、言葉について考えること
 が大事なことである。使いなれた
 言葉に新しさを感じる国語科授業
 を超えた人間力を育てる国語教室
 づくりが原点だろう。(吉永幸司)

**「読み解く力」向上
研修会に参加して**
北川 雅士

本年度は滋賀県の学ぶ力向上プラン「読み解く力プロジェクト」の推進委員として年数回の向上研修に参加してきた。「読み解く力プロジェクト」は県の学ぶ力向上滋賀プランの「読み解く力」の育成に向けて、各市町から選ばれた教員で研究チームを作り、総合教育センター研究員の方々と、読み解く力向上のための授業のあり方について実践的な研究を進めるものである。

読み解く力の向上研修に参加し、感じているのは「何か特別な事に取り組んでいくということではない」ということである。研修の際にはグループで話し合い、授業改善についてアイデアを出す。そこで出されるキーワードは「単元構想」「発達段階にあった課題設定」「導入時の疑問や考えの言語化」「学習をつなげる」「考えの変容を促すしかけ」「学び合う方法の積み上げ」「多様な考えの共有」などであることから、「読み解く力」向上への実践は、日々の授業をどう改善していくのかというところにあると考えられる。研修を通して「読み解く力」の2つの側面「A主に文章や図、グラフから読み解き理解する力」「B主に他者とのやりとりから読み解き理解する力」と「必要な情報を確かに取り出す(発見・蓄積)」「情報と比較し、関連つけて整理する(分析・整理)」「自分なりに解決し、知識を再構築する(理解・再構築)」の三つのプロセスをいかに普段の授業で意識しながら単元や毎時間の授業を作るかが大切であるということを確認することができた。

また、授業改善に関してもいくつかの大切なことを学ぶことができた。とくに今年度研修を通して学び、普段の授業で意識してきたのは「系統性を考え、前もって手立てをうつ」ということである。単元ごとに単発で学習に取り組んでいくのではなく、先々を見越して準備や手立てをうつことが、児童が主体的に課題に取り組んでいくためにとても重要であると感じた。教室掲示や学習の導入でも既習事項が想起できる手立てを考えたり、並行読書も直前ではなく前もって取り組んでいける工夫を行ってきた。あわせて対話のためのグループ作りや、話し方、まとめ方などの積み上げも4月から段階的に行うように意識してきた。ある研修の指導助言の際に聞いた「交流や対話は段取りが9割」という言葉は忘れないようにした。

学ぶ力向上滋賀プランとして「読み解く力」の育成に重点をおいて取組を進めるのは5年間の期間が設定されており、本年度はその1年目である。今年度の研究成果が次年度へ引き継がれ、研究を重ねることにより具体化していくものと思われる。この取組を県全体へ広げていくために、今年度研修を重ね学んだ成果を伝達していくとともに、今後も「読み解く力」を意識しながら授業改善に努めていきたいと考える。

(彦根市立城南小学校)

**第4回全国国語実践研究会
大阪大会 報告**
西條 陽之

「アップとルーズで伝える」「クラブ活動リーフレット」を作ろう(光村4年)の実践提案の機会をいただいた。

【本単元でつきたい力(書くこと)】
・ 対比的な説明の仕方を生かして考えを明確にし、写真と文章に対応させながら、段落相互の関係に注意して文章を書く力

【指導過程での具体的な工夫】
①書くことに対する苦手意識を解消するための工夫
・ 教師自作のリーフレットによるモデルの提示
・ 共通の教材でリーフレット作りの練習

②既習事項を生かした工夫
・ 「じどう車くらべ」や「すがたをかえる大豆」を用いた対比

③対比を生かした考え方の醸成の工夫
・ 関連図書の設置
・ 友達のアドバイスを生かした

・ 教師自作のモデルを提示することで、学習活動の見通しを持ち対比の使い方や段落の構成、接続語

などに意識を向けることができた。また、既習の教示を用いてリーフレット作りの練習を行うことで、書き方の認知、定着を図ることができた。そして、児童同士の読み聞かせ合いから、自他の気づきを生かした推敲を行う姿が見られた。児童にとつて「対比」の考え方が自分の技能として使いこなせる実感を引き出す機会となった。研究協議の中では、対比の視点がより明確である方が児童にとつても思考の一助になることや何のために対比をするのかという趣意をどれだけの子が理解していたのかについて「指摘をいただきたい。本実践では対比的思考そのものに焦点を当てていたが、教材を用いる意義を見出し授業を展開すればより魅力が増したのではないかと振り返って思う。

最後に、例会や研究協議において厳しく、真剣に、そして温かくご指導をいただいた先生方に御礼を申し上げたい。一つの教材について議論を重ねる時間を確保することが難しい昨今において、子どもファーストの持続可能な指導のために、教師同士の対話が今後重要であり、これからも学び合い、つながり合っていきたいと思う。

(大津市立小野小学校)

広がる読書 その1

北島 雅晴

◇夏休み、わたしは図書室でかりた本を読みませんでした。でも、「二の四の本」があつて、読書がすきになつて、冬休みも読む気になりました。わたしは、先生がしよいかいしてくれた王さまシリーズをかりました。この本を読んだら、たかしくんが、「それ、どこにあるの。」ときいたので、おしえてあげました。(以下略)

この文章は、二学期の読書生活をふり返つて書いた読書生活の記録である。

「二の四の本」というのは、学校図書館の司書の方に選んでいただいた二年生向けの本と、私の自宅から持ち込んだ本を合わせて三十六冊を学級文庫においたものである。毎週一回、図書室で本の貸し出しを行ってきたが、絵が中心の本を読むことが多く、本の種類にも片寄りがあると感じていた。一度、司書の方に相談したら、二十冊程度、二年生向けの本を選んでくださった。それらの本が、子どもたちにはけっこう人気がある。私が読んだことのない本がほとんどで、どの本も結構おもしろい。「さすが、司書の方はちがう。」と感心している。読書生活の記録に話を戻すが、この子の書いた文章から、三つのことが心に残る。「二の四の本」に

興味をもつてくれたこと、私の紹介した本に関心を示してくれたこと、そして友達との本に関する交流があることの三つである。子どもたちは、新しい分野の本を手にとることは少ないが、教師が紹介することで関心をもつてくれる子どもも多い。そういった点からも、教師の読み語りは効果がある。また、友達に紹介してもらった本を読むことも多い。

◆わたしは、来週の国語の学しゅうが楽しみで。それは「いきものすこいところ」という学しゅうがあるからです。わたしは、いきものがだいすきで、いきものすこいところをいっばいしらべたいです。(以下略)

ある女の子の日記である。「いきものすこいところ」というのは、生き物について調べたことを伝え合う説明文の学習のことだが、まだ学習していないうちから期待されているので、私もがんばらなければいけないと思つている。生き物を中心とした科学の読み物に興味をもつてほしいというねらいで行う学習である。読書の幅を広げてほしいという願いがある。

学習の基本中の基本は、読書と日記だと考えている。生活の一部として、文章を読んだり書いたりすることが自然にできる子を育てたいと思つている。

(草津市立笠縫東小学校)

一工夫で弾む子ども

杉澤 周一

毎日、授業を観させていたたい指導がいくつも見つかる。既出ばかりだが、子どもが目を輝かせ前のめりに弾んでおり、やはりよい実践だと再認識した事例。
○モデルとステップアップ
モデルを示し学習活動を段階的に設定し力を積み重ねる実践。
*音読

教師の範読に続いて真似て読む。

単元のはじめは、文節ごとや小さなまとまり、徐々に「や」「や」「まで一気に意味のまとまりをとらえる範読、それを追いかける。機を捉えて範読はなくし、一斉、さらに自立に向けて一人で読む。
*本文の該当箇所を線を引く。

一つ目を教師が板書でモデルを示す。二つ目を個々の子どもがやってみてペアで確かめ合う。それを教師が見取り把握し必要に応じて補う。三つ目から自力で。
見通しと安心を与えて学びのステージに乗せてあげたい。何れも子どもたちの声は弾んでいた。

蛇足ながら、当番の号令。「二人で」から「一人で」に、機を捉えてステップアップしてみてはと呼びかけている。人の前で一人で場にのびた声の大きさを、はつきりとした口調で伝える力を鍛えて伸ばしたい。指導する方に意図がないと力をつける学習機会がないまま活動だけが流れていく。

○ネーミング

力をつけ定着させたい学習活動に名前をつけて継続すると、個々とその集団の関心・意欲の喚起、維持、学び方が定着し学習効果につながることに身に覚えがある。その実践に出会えた。

*説明文の要約(四年)
・めあての提示「ズバリとスツキリで本論①段落を要約しよう」
・ズバリ技：書かれている内容の大事などところだけ残す。
スツキリ技：いらぬ所はけずつて文を短くまとめる。

「ズバリ技」と「スツキリ技」：この言葉を通して、関心・意欲の高揚と継続が単元を貫く。安心と自信をもとに繰り返し学習し力につながるやすい。単元学習後、「あの時のように…」と既習を次につなげやすい。今後、一人で自力で読むとき、この言葉を通して自力で想起して文章を捉えようとして、できるような定着が期待される。ある学校のある学級で、子どもが「先生、トリオをしたいです。」と申し出た。3人で話し合う活動に名前が付いていた。学びに向かう力につながると思つた。

これらに共通しているのは、「どの子どもも弾んで学べるようにしてあげたい。そのために、どのように工夫するか配慮するか」を常々潜在意識として宿していることではないか。相手は、たった十歳前後の子どもである。されど、それぞれに可能性をもつ。それを引き出したい。そのために意図して一工夫し、個々とその集団が弾んで学習できる舞台を準備したい。

(東近江市教育委員会学校教育課)

ていねいに

廣瀬久忠

新しい指導要領の目標にある「日常生活」とは何を指しているのですか。

これが吉永幸司先生の我々全教員への問いである。

「学校や家庭での改まった公の場」と答えるものあり、「朝起きてから眠るまで」と答えるものあり、「学校家庭地域での人やものとの関わり」と答えるものあり、「人との対話、情報の取り込み、説明書などの読み込み」と答えるものもありである。

吉永幸司先生は「日常生活を授業」ととらえてみたらと話された。そうすると「日常生活」の意味合いが途端にくつきりとした輪郭を持つようになる。

①日常生活に必要な国語については、その特質を理解し、適切に使うことができる。

②日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。

の目標が「授業に必要な国語については、その特質を理解し、適切に使うことができる」ようにすることだし、「授業における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」ようにすることである。

「では、そのような国語の授業をしていますか」が次の問い。なかなか顔があがらない。授業の中で発揮される国語の力を明確にとらえ指導してきたかを問われた。

菩提寺北小学校が令和元年二年の二年間、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校となり研究の窓口を「読むことの精査・解釈の力をつける」ために評価の仕方を考え、指導改善を図ろうと研究を進めている。

吉永幸司先生には、十一月八日に開催した中間発表会での全授業を参観いただいた。その上で、十二月、一月、二月の仮説検証授業をご指導いただくと共に三学期が始まってすぐの一月九日、座学による「読むことと精査・解釈」についてご講話いただいた。

読むことの構成は「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」からなる。

では、「精査・解釈」とは。文章の内容や形式に着目して読み、目的に応じて必要な情報を見つけて書くこと。書かれていること、書かれていないことについて、具体的に想像することである。

説明的な文章では、低学年「文章の中の語や文」を見つけて。中学年「中心となる語や文」を見つけて。高学年「必要な情報」を見つけて。「論の進め方」を考えることをさす。

文学的な文章では、低学年「登場人物の行動」を具体的に想像する。中学年「登場人物の気持ちの変化や性格、情景」を具体的に想像する。高学年「人物像や物語の全体像」を具体的に想像する。「表現の効果」を考えることをさす。

この二学年毎に示された指導内容を体系的に落とさず指導するために単元の配列と指導内容を焦点化させ意識的に指導ができるよう一覧表も作成した。子どもが言語活動をイメージできるようにB評価となる学習モデルも示すよう準備し、指導を工夫した。

吉永幸司先生からは「想像すること」をどう教えるかを丁寧にご指導いただいた。形や色や光など何を手がかりに読むとは。想像したことが言葉になるとは。多面的に読むとは。教材と子どもとの出会うせ方とは。会話文の読み方とは。等々、十二月、三年生が公開した「三年とうげ」を全教員が共通認識しているのその冒頭を読みながら、具体的に「想像して」読むことを丁寧に教えていただいた。

子どもが「想像して読むのはなぜ大切なのか」「想像して読むためには語彙を広げていかなければならないこと」を子どもが自覚できる指導が求められる。キーワードは「ていねいに」である。

(湖南市立菩提寺北小学校)

編集後記

▼十二例会(四百五十三回)は、第四

回国語実践研究会(会長吉永幸司)大阪大会(大阪国際交流センター)に参加。大会テーマ「生きる力を支える言葉」を育む国語の授業」をもとに、研究内容を深めた。▼滋賀県からは、「書くこと」分科会で西條陽之さん(大津市立小野小)が見方を広げて伝えよう「クワブルリーフレット」を作ろうという「どの子も書けるを指し、自他の気付きや見方、考え方を生かした指導の工夫」を発表。教材「アップとルーズ」(光村・4年)で学習をした「比べる」ことを生かして書く力を伸ばすことを意図した指導。対比という思考を、書く活動を通して育てるという新しさで、どの子も書ける」と一体になった提案。「読むこと」分科会で大塚将大さん(彦根立中央中)が「主体的・対話的で深い学びを旨とした説明文指導の工夫」生徒が自ら学び・積極的に表現できる授業づくりを目指して」を発表。教材を読む必然性を持たせる導入の工夫、ゴールの提示等、指導が作成したモデルの提示等、指導の工夫ともに、対話にも力を注ぎ、指導の1成果がよく分かる提案。尚「書くこと」分科会の運営責任者は好光幹雄さん▼講演は「『物語る力』を育てる」教室で文学テクストを読む意味」の演題で大阪教育大学教授住田勝先生。提案資料について学ぶこと(講評)を吉永が行った。

▼巻頭には、佐々木晃先生から、玉稿を頂きました。深謝。(吉永幸司)